ITITプロジェクト（国際研究協力事業）に参加して

佐藤良昭（燃料部）

昭和48年度から　工業技術院の国際産業技術研究事業の一環として　地質調査所ではインドネシア地質調査所との共同研究「東南アジア地域地質構造の研究」がスタートした．　以来４年が経過し　昭和51年度はその最終年度にあたり　現在　最終報告書をとりまとめ中である．この間　プロジェクトに参加して得た経験や　昭和45年から48年にかけてバンコクに駐在中得た　仕事上・生活上の実際的体験を　昭和52年４月　国際研究協力研修において講演する機会があつた．　本稿の大要は　その講演の再録であり　これから発展途上国との研究プロジェクトに参加される方々にとつて　何か１つでも参考になるならば　筆者の大いに喜びとするところである．

しかし　その前にITITとか　国際研究協力とは何なのかについて　簡単に紹介しておきたい．

国際研究協力とは

雑誌「工業技術」（1975年２月号）によれば　研究協力の必要性について　次のように述べている．

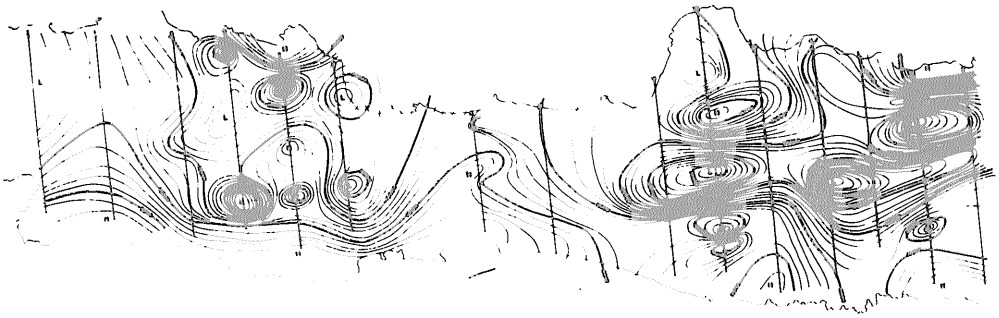
「第２次世界大戦以後　日本を含む先進国は　発展途上国に対して多額の経済・技術援助を行ない　これらの国の経済力を高めようと努力して来たが　それにも拘らず両国間の経済格差はむしろ増大してしまった．　その原因の１つとして　経済発展の中心となる技術の移転がうまく行なわれなかったことが上げられている．　すなわち　先進国で発展した技術をそのまま発展途上国に持込んでも　技術吸収の能力　技術を支える自然・社会条件の制約　あるいはその技術自体が　相手国の必要性とうまく嚙み合わなかったため　それら技術がなかなか　根づかなかったと考えられる．

このため　発展途上国が各種の技術協力を十分活用しさらに自力で発展させることができるように　発展途上国の科学技術能力の育成をはかり　必要性に応じた技術を開発し　既存の技術については根づき易いように改良し　さらには研究ポテンシャルの向上に役立つ研究を強力に推進する必要が認識されるようになった．

わが国でもこれら研究面での協力が　国際的責務であると考えられるようになり　昭和48年７月　工業技術院内に国際研究協力官室が新設された．　ここでは傘下試験研究機関の研究能力を活用して　発展途上国のための研究協力を進めると共に　各種の国際交流事業を強力に実施している．」そして今後さらに技術移転促進の中核的機能を果す専門的機関として　「国際産業技術研究センター」の設置も考慮されている．　このセンターの英語名が Institute for Transfer of Industrial Technology であって　この頭文字（ITIT）をとり　国際研究協力事業を含む国際産業技術研究事業を「ITIT　事業」　研究プロジェクトを「ITIT　プロジェクト」と呼んでいる．

① インドネシア地質調査所（バンドン市）

② インドネシア地質調査所構内にある重力の基準点



③ 重力データから得られたジャワ島の深部構造図（データ解析図の1例）

基本的考え方

この研究協力に対する　わが国の基本的考え方としては　次のような6項目が打ち出されている．

(1) 国の最重要政策の1つとして　研究協力に取りくむべきこと
(2) 発展途上国の自主性を尊重し　対等な立場で協力すること
(3) 発展途上国の真のニーズに対応した　技術の開発を行なうこと
(4) 研究協力に対する　適切な評価体系を確立すること
(5) 国内での人材を　養成・確保すること
(6) 研究協力の　長期的な協力計画を確立すること

地質調査所ではITITプロジェクトとして　東南アジア地域の地質構造の研究を実施している．

東南アジア地域地質構造の研究

目　標　アジア大陸の外縁に沿い　日本―フィリピン―インドネシア―マレー半島西側には島弧の系列が発達している．　これらの島弧に沿つては　海溝　縁海　火山や　石油・天然ガスを胚胎する堆積盆地　銅・鉛・亜鉛・金・銀・砒素・アンチモニー・錫などの非鉄金属鉱床が　ある規則性を持つて分布しているように見られている．　これらの地域は　世界における変動帯の一環として　各国の地球科学者の大きな関心をひき　地球科学の近年の発達に伴い　グローバルな観点から　島弧系列の発達と鉱床分布の関係　地震活動・火山活動との関連　海溝・縁海の成因などが　活発に論じられるようになつてきた．

本地域の鉱産資源の分布は　地質構造発達史と密接な関係を持っているが　従来　発展途上国では目前の鉱床の発見に重点がおかれ　基本的問題解決の努力はあまりみられなかった．　東南アジア諸国では　すでにかなり多くの物理探査の結果が現地の地質調査機関などに蓄積されているが　データの系統的な処理や十分な解析が行なわれているとはいいがたい　そこで　蓄積されたこれらのデータや　あるいは現在実施しつつある物理探査プロジエクトのデータを　わが国との共同研究によって処理・解析して地下構造を求め　さらにその他の地球科学的諸情報と共に総合解釈して　広地域の地質構造とその発達史を明らかにし　鉱産資源分布の予測も行なおうとするものである．

④ バイソン磁力計による　岩石磁化率の野外測定（中部ジャワ　ディエン付近）

経　過　このための最初のプロジェクトとして　地質調査所はインドネシア地質調査所と　ジャワ島およびその周辺地域における　主として重力データの処理・解析とその解釈について共同研究を行なうこととなった．本計画は昭和48年度から同51年度にわたる4ヶ年計画であった．

昭和48年度には　インドネシア地質調査所と研究計画の詳細な打合せを行ない　さらにジャワ島重力データのデジタル化と各種フィルター処理ならびに定性的解析を実施した．

昭和49・50年度には　スペクトル解析を実施し　それに基づいて　地下深部および浅部における密度異常の境界面の深さを求めた．　また　ジャワ島内で構造解釈上重要と考えられる地域　4帯を選び　南北に踏査してルート上での地質野外観察　岩石の磁化の大きさ　ポラリティーの測定を実施し　さらに岩石物性測定用および微化石研究用の岩石試料を採集した．　これら試料については　帯磁率　自然残留磁気　密度　孔隙率　弾性波速度などの室内測定　高圧下岩石変形試験　有孔虫分析　重鉱物分析などを実験室で行なった．

昭和51年度（最終年度）には浅部重力構造の解析　岩石磁気　地質構造　層位・古生物の研究を引続き実施しこれらデータに基づく構造モデルを検討しつつ　研究成果をとりまとめている．　この成果は　昭和52年度中にインドネシア地質調査所で印刷　発行される予定である．

この間　日本での研究を進めるため　インドネシア地質調査所から　延５人のフェローが来日し　主に地質調査所で研究を行なった．　その氏名は次の通りである．

M Untung	プロジェクト	リーダー		48年度
	地球物理研究課		課長	
G. S. Akil	〃	〃	課員	49年度
Sutisna S.	〃	〃	〃	50年度
M. Untung	〃	〃	課長	51年度
Suharno H.	〃	〃	課員	〃

（延滞在日数 305 日）

昭和51年度は　本プロジェクトの最終年度であり　研究とそのとりまとめのため　インドネシア側からぜひとも２人受入れて欲しい　そのためには　１人分の往復航空運賃をインドネシアが負担しても良いとの強い要望があり　国際研究協力官室の配慮の結果２名の受入れが決定したいきさつがある．

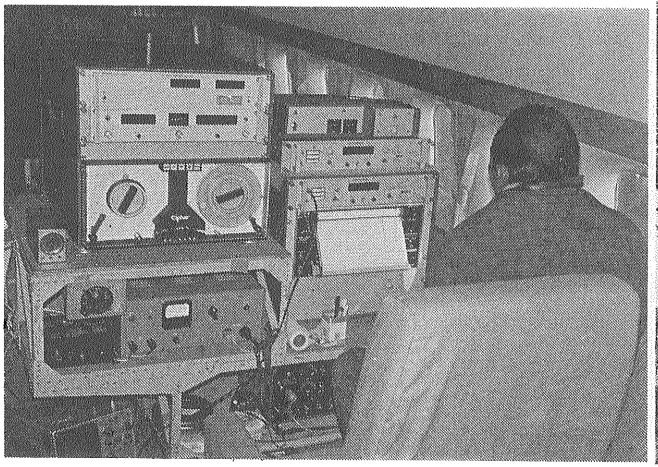
体験的問題点　I　仕事

最初にも述べたが　これから書く　仕事　生活　マナーなどに関するいろいろな問題は　この８年間　バンコクの CCOP　ECAFE（現在の ESCAP）に勤務中（昭和45年～昭和48年）および　ITIT　プロジェクトに参加中の体験をもととしたものである．　筆者の主観が強すぎると思われる部分があるかもしれないが　私の強く感じたことをそのまま記したものなので御容赦願いたい．

各国の現地事情を知るためには　まずその国に関する旅行案内を読むことが常識ではあるが　それを全面的に信用してはならない．　そこには大体　良いことばかりが書いてあるものと承知して欲しい．　いろいろのことが美しく楽しそうに書かれているが　それを全面的に信用して天国のような所を期待して行くと　幻滅を覚えることになる．　旅行案内に限らず　情報を読む時には　それを信用してよいものか　**何が書かれていないか**　を常に考えることを身につけたい．　外国で最後に頼れるものは自分の判断だけである．

心がまえ　ITIT プロジェクトに限らず　外国で仕事をする時に　まず心すべきことは　次の５A（文芸春秋52年６月号）を身につけ　楽しく健康に過すことが第１と割りきることである．　すなわち

あわてず　あせらず　あてにせず　あきらめず　頭に来ず



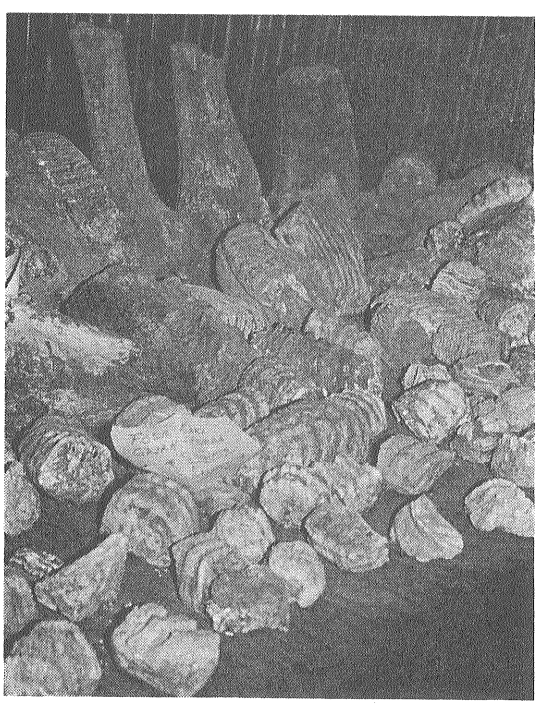
⑤　YS—11機内で　プロトン磁力計をみるインドネシア側　プロジェクト・リーダーウントン課長（九州にて）

⑥　9世紀頃　建てられたシヴァ教のプランバナン寺院．ジョクジャカルタ市にある．

これはいうは易く　行なうは難いことであるが　このように身を処することにより　ゆとりが生まれ　対人関係も　チーム　ワークも旨く行くのである．

ITIT プロジェクトの精神は　相互対等であり　相手の自主性を尊重し　**相手国に対して研究面での有形の利益を与える**　ことが本旨であり　**わが国の受ける利益が無形の精神的なもの**　に止まったとしても　有意義であるとされている．　すなわち　対等に付合い　しかも相手のためにサービスすることに喜びを見出せなくてはならない．くれぐれも　"やってやっているのに" とか "程度が低い" とか "能率が悪い" などという意識や態度を示すことのないように．　いわれなき優越感を持つ人は国際協力に不適格とさえ思われる．

外国人の物の考え方　外国人は　一般に過大とも思われる要求を平気で出してくる．　そして　これがそのまま通ってくれれば大もうけであるし　交渉によって段々と譲歩をした結果　妥当な線で落ついたとしても彼にとって別に失なうものは何もなく　モトモトで当たり前という考え方が強い．　したがってわれわれとしても　必要なことは主張し　できないことは断わり　論理的に　粘り強く　はっきりした態度をとるべきである．われわれによくみられる　断わっては具合が悪いのではないかと何でもイエスといったり　マアマアと中途半端でおさめるようなことは　絶対に慎まなければならない．



⑦　象の化石．　サンギラン村（中部ジャワ）の博物館？にて．　付近はジャワ原人の産地として有名．

出張計画のたて方　現地研究のために海外出張する時は　事前に十分　相手方と時期その他について打合せを行なうわけであるが　その際不断は気がつかないでいるが　特に念頭におく必要のある事柄を記してみよう．

まず　スケジュールは余裕をみて作成し　1日に幾つも仕事をする計画を立てぬこと

予算年度の違い　インドネシアでは4月～翌年3月である．　しかし対象国によって予算年度は違う場合がある．また予算のあまり無い時期とか　年度末で報告書作成や会計報告に多忙の時期など　さまざまであり　そのような時期をはずす必要がある．

季節　熱帯地方では　雨季と乾季があり　面積の広い国では　同じ国内でも場所によって季節が違っている．　インドネシア　ジャワ島では乾季が　5月から9月位であるが　タイのバンコク周辺での乾季は11月～翌年4月である．　気温は年間を通じて高く　日本の真夏程度と思っていて間違いないが　それでも　バンドンでは標高約700mあるのでかなり涼しく　長袖ないしは薄いセーターの1枚も欲しい時がある．タイで一番涼しい時は12月ないし1月で　気温も20～28度と過し易いが　2月から盛夏に入り　2・3・4月は　年間でもっとも暑い季節となる．　よく冗談に　タイにはホットホッター　ホッテストの3シーズンがあるというが　そのホッテストにあたり　学校の長期夏季休暇もこの頃である．

行事・祝祭日　回教徒にとって　もっとも大切な行事は回教暦によって行なわれる毎年1回　1ヶ月間の断食と　断食明けのお祝である．　9月頃の1ヶ月がそれにあたるが月の運行によってきめられるので　毎年始まりの日時がずれて行く．　この期間中は　日の出から日の入りまで　一切のものを口にしてはならず　水・煙草はもちろん　極端な場合には唾さえ　のみ込んではいけないとされている　したがって　日中は空腹でいらいらしており　作業能率も下がり　交通事故も増えると聞いている．　そしてこの断食が明ければその日から最低1週間は　日本の正月と同じく最大の楽しみの期間であって　晴着を着て　御馳走を食べ　親類・縁者友人を尋ね歩き　まったく仕事にはならない．　長期滞在ならともかく　短期間の出張の場合には　断食明けの頃は特に避けなければならない．
この他　国によって独立記念日とか　国王誕生日など　祝祭日がそれぞれ違っているうえ　土曜が休日の国（タイ）　そうでない国（インドネシア）があるので　注意する必要がある．

勤務時間　インドネシアの官庁は　月曜から木曜が　7：30～14：00　金曜は11：00　土曜は13：00までとなっており　昼食は帰宅後にとる．
タイでは　8：00～16：00　あるいは8：30～16：30　国連機関の ESCAP は7：30～15：45　2月～8月は夏時間で7：30～15：15と30分短縮される．　相手方と面会時間をき

める上で　以上のことを考える必要がある．　金曜日の午前ジャカルタに着いて　午後　政府の人に会うというような日程を立てても　それは不可能である．　なお時差についても体調を整える上に　また　電話連絡が必要になった時などのために注意を払う必要がある．

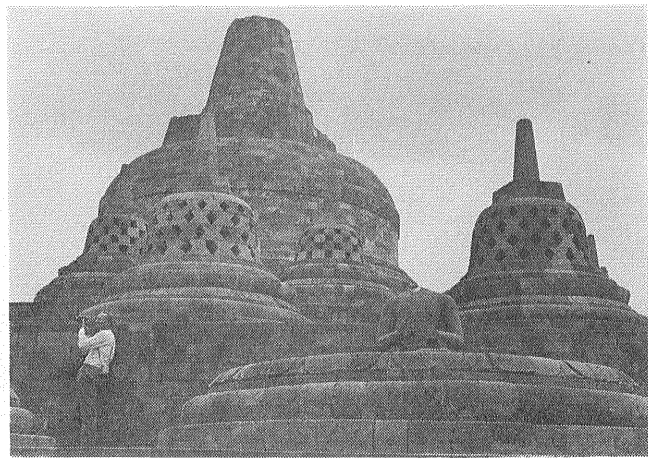
携行品　一般的な物は別として　特に気のついたことを挙げると　携行器材の選び方は　まず丈夫で長持ちするもの　そして修理のし易いことを第1に考えるべきである．　故障した時　現地では部品の入手が困難であるし　長期間の貸与をした場合　メインテナンスが悪いと使い物にならなくなるおそれもある．

短波ラジオ　都会では英字新聞が読めるが　そのニュース量は限られている．　日本のテレビ・新聞から解放されて　静かな研究生活を楽しみたい人は別として世界事情　日本事情にある程度フォローして行きたければ　短波ラジオを持参するのが適当であろう．　インドネシア地域では　小型の物でも　VOA（米）　BBC(英)　ABC（オーストラリア）等は普通に受信できる．　しかしNHKの国際放送（ラジオ日本）を聞くには　15〜16メガヘルツ　19mバンドが含まれている物の方が望ましい．　なお　国内用と海外用では　波長域（特にFM）電圧などの仕様が違っているので注意が必要．

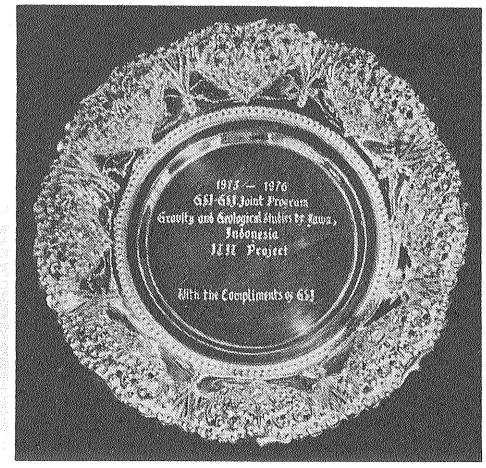
勤務中以外は　スポーツ　シャツが一番気楽であり　シャツは現地で購入した方が土地柄に合っている．　しかし　土地に合ったもの程　日本に帰った時には　場違いの感じになるのは　やむを得ないだろう．　また室内履としてゴムゾウリあるいは軽いサンダルを持参すると暑い所では大変便利である．

税関について　さて荷物を持って出発から帰国するまでの間　つきまとう関門が　税関である．　日本を出発する時には　それ程問題にならないが　それでも航空貨物で器材を送り出す時には「無為替輸出承認書」が必要であるし　この手続きをとって持出したものは持帰らなければならない．　別送便（いわゆる　アナカン　Unaccompanied Baggage）は　送料が安くて　多量の物を持って行く時には便利であるが　内容は「身の回り品」に限られる．　器材も身の回り品となり得るがこれを現地で受取る時には航空貨物と同様面倒な手続きと非常な時間がかかり（1週間位？）相手側でよほどきちんと手筈を整えておいてくれない限りは　おすすめできない．　重たくて超過料金をとられるであろうが　自分自身で持って行く方が確実である．　この時　器材が外国製品であれば「外国製品持出し届」に記入　あるいはリストをタイプしておき　羽田の税関でスタンプを受けておけばよい．　持帰る必要がなければ　この限りでない．

インドネシアに入国する時には　入国カードと共に税関への申告書を書かされるが　内容品の所にはPersonal Effects Only とだけ記入し　価格の所にはNo Value とし　余計な事を書かない方が良い．　私共の場合　第1回目は日本大使館の方が来て下さり　フリーパスであった．　第2回目は器材がひっかかってしまったが　インドネシア地質調査所の担当者が　準備した書類その他を持って奔走してくれ　数時間後にやっと解決したとのことである．　税関にまつわるいろいろな噂があり　幾ら請求されたとか　パスポートに金をはさんで無事通過したなどといわれているが　私自身はこれまでこのような経験がないので　どうしたら良いのか　何とも申し上げかねる．　とに角検査はかなり厳しく　御土産なども綺麗な包装を全部破いて　中身を調べる．　私は何時も



⑧　ボロブドールの仏教遺跡．　ジョクジャカルタ市郊外にあり　8世紀〜9世紀頃建てられた．



⑨　プロジェクト終了にあたり　記念としてインドネシア地質調査所から贈られた　銀の飾り皿

現地のバティク　シャツのラフな恰好で出掛けているが旅慣れた様子から　税関で見逃してくれているのであろうと　勝手に解釈している．

インドネシアを出国する時にも検査があるが　これはそれ程うるさくない．　禁制品のチェックが主のようだ．日本へ入国する時の準備の方が大事である．　現地から研究用のサンプルなどを別便で送った場合は（アナカン小包　船便　航空便を問わない）　機内で配ってくる申告書を２通貰い　持参する酒・煙草から御土産品まで免税点以下であってもすべて記入した上　さらに「別送品」の項目に総個数を記入する．　日本の税関では　サインスタンプをした後で１通を返してくれるが　この書類がパスポートと共に　後日荷物引取りの時の重要書類となる．　このため　相手国出発以前に　別送品の個数　それぞれの内容リストをしつかり作成しておく必要がある．

Permanent Address：入国カードその他で　時にこの言葉にお目にかかるが　これは日本訳に見られる〝本籍地〟ではない．　本人が世界のどこにいても手紙がとどく　連絡先といつたもので　われわれからいえば　日本における〝現住所〟がこれにあたる．　今は誰もいない戸籍上の本籍地を記入したため　外国からの重要な連絡が非常に遅れて到着した実例もあるので要注意．

体験的問題点 II 生活

東南アジアの地を初めて踏んだ時にはその暑さ　騒々しさ　乱雑さ　異臭などにまず辟易し　大変な所にやつて来たものだと思うかもしれないが　数ケ月もすればそれに慣れ　帰国後にはこの時の生活が楽しく懐かしく思い出されるものである．　これらの国々で生活するための心構えは　〔体験的問題点 I〕　でも記した５Ａである．　特に腹を立てないで待つ事が肝心である．

外国の風俗　習慣　考え方は　海で囲まれ単一民族からなる日本の環境から生れ育つたものとは　全く正反対といつても良い．　はじめは面喰うが　我々の文化と同様　相手方にも長い文化の伝統があることを常に念頭におき　一方的見方をしないよう心掛けるべきである．日本的なやり方　考え方を一方的に押しつけ　それが通用しないといつて　腹を立てたり　あせったりしては協力関係をぶちこわしてしまう恐れさえある．　われわれ以外の考え方のシステムがあるということを認識し考え方に弾力性を持ち　両者のシステムを比較して　場合によつては日本の方が少し変っているのではなかろうかという位の　自由な発想のできることが望ましい．

郷に入っては郷に従え　インドネシアあるいはタイにおいても　身分差（というか階級差）が存在しているようである．　仕事中経験したことでは　科学者とテクニシアンと運転手の間には　かなりはつきりした区別がある．　野外で一緒に仕事をしても　食事の時には　運転手は別のところで食事をしている．　科学者とテクニシアンの間も　あまりはつきりはしないが　テクニシアンを一段低いランクにおいている感じがある．このような国へ行つている時　日本式に親密さを表わそうと運転手に対して「やあ御苦労さん　一緒に飯でも喰おう」といつても　〝あの人はわけへだてのない　よい人だ〟という評価よりも　運転手と同列に身を置く変な奴だと　軽んじられかねない．　仕事をスムーズに進行させるためにも　カウンター　パートとよく相談し　その国の習慣をききながら　事を運ばなければならない．

コミッション　わが国の新聞を良く賑わすが　こ

⑩　インドネシア地質調査所の　ＩＴＩＴ研究室における筆者

⑪　タイの民家の１タイプ（バンコク郊外のエインシャント・シティにて）

れも必要悪の感じである．　私の場合いわゆる「袖の下」というより　やつてくれて有難うとの御礼（チップ）の感じで支払つている．　インドネシア地質調査所内では事を運ぶための支出はしたことがない（プロジェクトリーダー　ウントン課長の人柄による所が大きいが）．しかし　長期滞在後（2ケ月以上）の出国許可手続きに当つては関係機関担当者（複数）　岩石標本などの発送に際しては空港貨物扱いの受付　税関に　1人1,000ルピア（1米ドル≒415ルピア）程度の金を必要とした．私が直接渡したわけでなく　この手続きに慣れているカウンター　パートが要所々々で　支払ってくれたのである．　断食明けの前には　回教正月の支度をし　家族の者に晴着の1つも買つてやらねばならぬため　特にコミッションの要求が多くなるという話もある．

人間性　東南アジアの人達は　商売についてはがつちりしているが　人からものを尋ねられたり　頼まれたりした時には　気がいいといおうか　知らない・できない・わからない　とはいわないことが多い．　相手の期待に沿わなくてはという気持からか　やります・できます・つくりますの答えが返つてくる．　したがってやつてくれるものと期待していると　翌日になつて裏ぎられたという感じを持つことになってしまう．　これに対応するため　われわれとしては心のすみで常に〝計画通りに事は運ばないぞ〟とつぶやきつつ　その場合の対策を考えておけば　いらいらすることもない．

お金・買物　現地に到着すると　円なりドルなりのキャッシュあるいはT.C.（旅行者小切手　この方が安全）を現地通貨に両替することになる．　ホテルの会計でも両替はできるが　一般的にいつて交換レートが悪い．　銀行はどこでも　その国の公定交換レートで両替している．　この時注意すべきことは　必要以上の金を交換しないことは勿論であるが　交換された現地通貨をクラークの面前できちんと数え　確認することである．相手に変な気兼をすることなく　堂々と勘定すること．窓口で確認しないまま受取つてしまえば　後からはクレームのつけようがなくなる．　私も　銀行ではないが1,000ルピア紙弊10枚づつの束で7万ルピア受取つた時後で数えてみたら真中の一束には9枚しか無かつた経験がある．　以上のことはお金の授受のある時には常に心していなければならない．　またホテルやレストランの支払時にはレシートがあっても　なくても必ずその項目と金額を確め　しかもその合計があつているかどうかチェックする習慣を持つようにならなければならない．計算違いには　しばしば出合うものである．

順序が少し逆になつたが　買物に限らずお金を使う際には　タクシーでも食事でも　必ず最初に値段を確めること　そして値切ることを習慣にする必要がある．　値段を決めておかなかつたため　支払の時に目をむくようなことになつても手遅れである．　（食事・飲物を値切るのはさすがに無理であるが　高いと思った時は止めて他の店へ行けばよい．　一度入つたのだからと義理を立てることは毛頭ない．）

この　物の値段を値切るということは　短期滞在の者にとつては大変面倒であり　金ですむなら少々のことはと普通考え勝ちである．　しかしこれが高じると日本人は金離れが良い　金持だとの評判が立ち（現にそうである）　結果としてさまざまな物価に波及して　駐在している長期滞在の邦人が大きな迷惑をこうむることに思いをいたして欲しい（人の立場まで考えること）．

盗難　トランクの中に金をしまつておき　鍵をかけ忘れたために金を抜かれた例　繁華街でスリにあつたり　あるいは数人に囲まれて金をとられた例　足元あるいは車の中に一寸置いた鞄を盗まれた例など　盗難は割合い多いといえよう．　これにどう対処したらよいかどうもいい知恵の持合せはない．　せいぜい　あまり金を持たず　目立たない恰好をして歩く位のことしかいえない．　（日本人旅行者は　観光の時も　Yシャツ　ネクタイ姿が多く　カモになり易い）．ただし　これは伝聞であるが　いかなる時にも1,000ルピア（インドネシア）あるいは100バーツ（タイ）の札は　取出し易い所に入れて歩くこと　これは強盗にあつた場合の　生命の保証が得られる最低の金額であつて　これ以下では相手が腹を立てて　殺されかねないし　これ以上は盗られるのがバカバカしいというぎりぎりの額であるという．

衛生　とに角この地域は熱帯であるので　真夏に日本を出発しない限り　非常に大きな気温変化に　さらされるわけである．　従って　体が気候に慣れるまでかなりの時間を要する．　現地に到着当初は　特にやらなければならない仕事が多いが　この様な事情から　特に初めの中は　ゆつくり汗をかかぬよう行動すること　極端にいえば　1日に1つ仕事がかたずいたら　良しとしなければならない．　到着後3日目　あるいは1週間目おそくも1ケ月後には　よく原因不明の熱が出たり腹をこわすものであるが　私は2　3日の休養で直してしまつたので　如何なる手当（薬など）が適当であるか確言できない．　一般的薬品としては不断使用している解熱剤　胃腸薬のほか　使用法を心得てクロマイ系の薬を持参すれば　大体安心していられよう．

バンコクでは　幼稚園以上の子供を持つた日本人家庭ならば　日本人学校から配布された　市内の病院　医院の住所と地図　それらの専門科目と通じる言葉を記入したパンフレットを持つている筈である．　ジャカルタやバンドンでこのようなものがあるかどうかは　寡聞にして知らない．　大都市ではマラリアの怖れは無くなつているが　タイでもインドネシアでも　田舎へ行けば蚊は多いし予防策を構じなければならない．　予防薬としてはレゾヒン　Resochin (Bayer) を出発の１週間前から毎週１回２錠づつ　帰国１週間後まで続けて呑んでいた．しかしこの薬は燐酸クロロキンを含んでいて副作用があるため日本では販売禁止となり　購入不能となつてしまつたがジャカルタでは容易に入手できるようである．

毎日毎日が猛烈な暑さであるが　ホテルなどで飲用として持つて来たもの以外の　水は一切飲んではいけない．洗面所の蛇口の水も駄目である．　では何を飲むかといえば　御茶か清涼飲料水である．　御茶は熱いのをのんでいる分には　間違いないであろう．　コーラ　ファンタ　セブンアップの類は　どんな田舎に行つてもある．

しかし冷えたコーラは　田舎では求められない．　冷たいのが欲しければ　氷と共に注文するほかない．　そうするとコップにかちわり氷の大きいのを入れて出してくれる．　しかしこの氷が衛生的に難物であつて　慣れない中は　敬遠しておくのが無難であろう．　ハイボールのグラスの底に　白いおりが沈澱することも　さる所で経験した．　われわれ地質屋は神経が鈍いのか　ビール　コーラに氷を入れたのを毎日のんでいても　別に異常は生じなかつたのであるが．

一言トイレについて注意しておくと　一般の便所は後始末から洗い流しまで　ひしゃくによる水洗方式となつている．　この方式に自信のある人は別として　ホテル以外の所に宿泊する時には　トイレット　ペーパーを持参する必要がある．　なお　毎日トイレあるいはその隣りの部屋で水浴をすることになるかもしれず　タオルの他に　バスタオル１枚を持つていると便利である．ホテルのみに宿泊するならば　これらは無論必要ない．

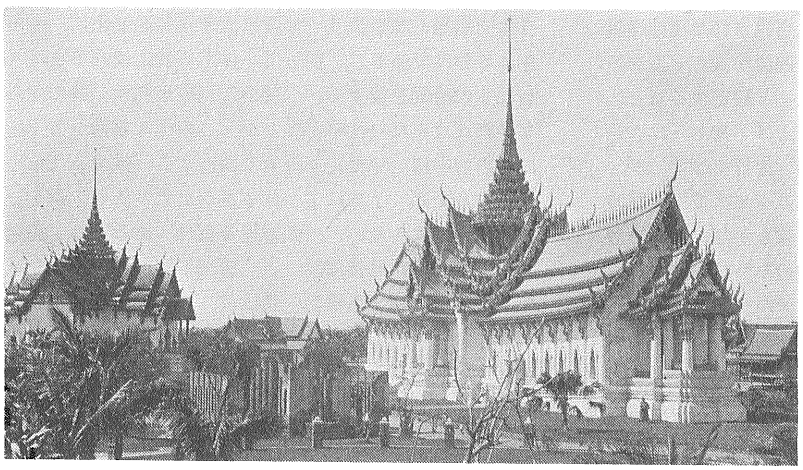
自動車　一般論をいえば　海外勤務をする者にとつて語学と自動車運転は不可欠のものであり　国際免許を持つて出発すべきである．　といつても土地不案内で言葉も文字もわからない　標識・標示が完備しているとは限らない．　事故の時の処置などを考えると　とても自分で運転できるものではない．

そこで現地の運転手にすべてをゆだねるわけであるが彼等の運転は　大体非常にあらく１昔以上前の日本のダンプの感がある．　高速と無理な追越　割り込みは日常茶飯事で　これができなければ走れない．　こちらの心臓はドキドキ　ハラハラの連続であるが　彼等には彼等の習慣　リズム　プライドがあり　注意したからといつてなおせるものではない．　このような車に乗つた時は運を天にまかせて　あきらめる外はない．　また歩行者の立場からいえば　日本と同様車優先社会であるから道路の横断には細心の注意と　車のすきを見て一車線づつ前進する度胸も必要である．　現地で面白く感じたのは　この怖いもの知らずの自動車が　山羊やにわとりあひるが道路にいたり横断していると　相手がひなであつても除行　あるいはピタッと停止する．　ひくと弁償しなければならないからだという話であるが　それなら人間の場合はどうなるのであろうか．

体験的問題点 Ⅲ マナー

一　般

最近のマスコミで　海外における日本人の行儀の悪さが　よく取り上げられるが　外国へ行つた時の礼儀・作



⑫
タイの寺院
（バンコク郊外　エインシャント・シティにて）

法はどうあるべきかについて　僭越ながら私の考えを申上げたい．　一言にしていえば　日本で昔から伝わつて来た　正しい礼儀・作法は　万国で通用するということである．　日本で〝無作法な〟とひんしゅくをかうようなことは　どこの国へ行つても無作法である．　相手の人格・立場を認め　相手に不快感を抱かせぬ態度を基盤として　振舞つて頂きたい．　国内の公共の場所で　しつけの悪い子供あるいは大供が多数みられる昨今であるが　あれがそのまま外国へ行つたらどのようなことになるか　想像するだけで恐ろしい．

マナーも細かくいえば各国それぞれお国ぶりがあつてくしゃみをした時には慌てて Excuse me という人がおならをしても平気であつたり　静かな会議中の席で轟きわたる大きな音で鼻をかむ　アメリカ　ヨーロッパの人達もおり　規準は少しづつ違つているが　とに角日本古来の礼法で間違いはないといえる．

食　事

ホテルの食堂などでしばしば見うけられるが　食事時の姿勢の非常に悪い人が多い．　しかもその上足を組んで食べている人さえもいる．　この猫背の原因は椅子の坐り方にある．　椅子に深く腰をかけ　握りこぶし1つ分位空くように　テーブルの方へ引きよせれば　上体は真すぐとなる．　そして食物の方を口へ運ぶこと　口からお迎えに行つてはいけない．　テーブルと体が離れているため　猫背となつてしまうのである．　おまけにテーブルに肘をついて食べるなど　何をかいわんやである．

人と食事を共にする時は　会話と食事の両方を楽しむこと．　われわれは　特に昼食時など　黙つて数分間でさつさと食べてしまうことに慣れ何とも思わないでいる．（日本のランチ　タイムの混雑ではのんびりできないため　悲しい習性がついてしまい　無理ないのであるが）　しかし簡単な昼食であつても　前後30分以上小1時間かけて　歓談しながら食事をすること．　次に日本の食事では　特にそばなど　音をたてて電気掃除機式に吸い上げることが当り前となつていて一つの文化ではあるが　どの本にも書いてある通り　よそへ行つた時は　音をたてない様に注意して貰いたい．　音をたてないこつは　先にもいつたが　食物を口もとへ運び　重力に従つて口中に入れることである．　すなわちスープならば　スプーンを口と同じレベルまで持つて来て　端を傾けて口の中へ注ぐ感じである．　口がスプーンの上方にあれば　どうしても吸引せざるを得まい．

音に関連していえば　ナイフやホークもできるだけ音をたてない様に使うのがあたり前であるが　食事時の会話も公共の場所では大きい声を出さないよう　傍若無人な笑い声をたてぬよう注意する必要がある．　グループ内だけに聞える程度の　おさえた声で話をするのが　一般的マナーである．　日本人と欧米人の　この対照的な差がジャカルタでいえば　プレシデント　ホテルとホテル　インドネシアの　コーヒー　ショップで　はつきりと感じられる．

通　行

一方の人が進路を少し変更せざるを得ない程のせまい廊下や通路で　人とすれ違わねばならない時は　自分から一方の端へよつて止まり　相手に道をゆずろう．　人口密度の高い特にラッシュ時の日本の事情から　せかせか歩いて　人の間をすり抜け　時には人を押しのけて通行することを　われわれは何とも思わなくなつてしまつている．しかし人に触れそうになつただけでも Excuse me が出てくる外国の人達にとつて　このような振舞は大変無礼なことになる．　われわれも人に道をあけて貰わねばならぬ時は　黙つて押したり割り込まず Excuse me が反射的にすつと出てくるようにしたい．

む す び

以上思いつくままに　勝手なことをいろいろと羅列してきたが　最後にあたり　中根千枝氏の書（1972）の一節をとつて結びとしたい．

「国際的な仕事に従事する人々には　諸現象に対して旺盛なる好奇心を持ち　異質文化に出合つてもたじろがず相手のシステムを乱さず　相手側が抵抗や疑惑を持たないパーソナリティを有し　自己顕示欲よりも観客であることを望むタイプで　観察力　洞察力　寛大さ　謙虚さを持つことが望まれる．」なおこの本は　われわれ日本人が異なる環境におかれたり　予知しなかつた場面に遭遇したとき　どのように反応するものか　その反応の基盤をなす日本的システム・価値観にどのような理論的特色がみられるかを考察し　日本の対外活動において最も必要な諸条件について述べた　国際協力に関心を持つ人々にとつての　有益な書であることを付記する．

参 考 文 献

国際研究協力官室　1975：発展途上国との国際研究協力．　工業技術　昭和50年2月号　p.9～25.

中根千枝　1972：適応の条件　講談社現代新書300　181p.

城山三郎　1977：大地燃ゆ　文芸春秋　昭和52年6月号　p.350～363.

鳥羽欽一郎　1973：二つの顔の日本人　中公新書319　222p.
本文中では本書に触れなかつたが　著者がマレーシアで得た体験から　日本人の考え方　行動様式　問題点を論じた好著である．

松山幸雄　1977：日本診断　朝日新聞社　245p.